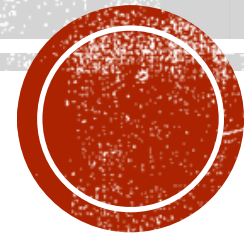


ウクライナの 戦略的重要性

軍事・安全保障の見地から



小泉悠（未来工学研究所）
2014.4.21

1. 地政学的重要性

(1) ウクライナのロケーション自体が持つ重要性

「geopolitical pivot」としてのウクライナ（ブレジンスキー）

- 黒海のほぼ中央に位置（黒海の制海権確保）
→シーレーン保護と米海上プレゼンスに対する「拒否」（denial）
- 地中海の軍事プレゼンスを支える上での重要性
- ロシア南部と長い国境線を有する
（ウクライナがNATOに加盟すれば南部国境でNATO軍と対峙しなければならない）
（MDシステムの配備先としてもロシアには脅威）

(2) ウクライナ国土の地理的特性

- 極めて平坦な土地（天然の要害がない）

2. 軍需産業面での重要性

ウクライナとロシアは軍需産業面で深い相互依存関係を持つ

(1) 航空産業

- モトール・シーチ（ロシア製ヘリコプター用エンジンの大部分を生産）
- アントノフ（ロシアが最近まで独自生産できなかった大型輸送機を生産）

(2) ロケット・宇宙産業

- ユージュノエ設計局／ユージュマッシュ工場
（ロシアの主力大型ロケット「プロトン-M」の部品やR-36M2重ICBMのメンテナンス等）

(3) その他

→ロシアは国産化率を高めることでウクライナ依存の脱却を目指す
ウクライナから第三国への技術流出の懸念も

3. ウクライナの軍事力

(1) ソ連崩壊後のウクライナ軍

- ソ連軍から受け継いだ膨大な軍事力の削減が課題
- ごく小規模な紛争への対処vs大規模侵略への備え
- NATO加盟vs独自防衛
- 深刻な汚職による改革の停滞

(2) ウクライナ軍の現況

- 兵力18万4000人
 - ロシア軍の4分の1ほど居る計算だが、兵力削減に失敗しただけ
 - 戦闘任務を遂行可能な部隊はごくわずか
- 失敗装備更新も予算不足と汚職により失敗

⇒「国民親衛隊」などにより国民を武装化させて親露派に対抗せざるを得ない状況

4. 東部諸州へのロシアの介入

- クリミアに展開したのはロシア軍そのもの（装備等より明らか）
- 東部諸州では誰がどの程度介入しているかははっきりしない
⇒ 少数の工作員が潜入し、現地の警察や元治安部隊隊員、住民などを組織している？
（ロシアが事態を完全に制御できなくなる可能性）



クリミアに展開したロシア軍



東部スラビャンスクの武装集団